

市民性の育成を目指す高校探究学習におけるモデレーション実践の研究 —氷見高校 HIMI 学を対象に—

42325012 本田 達也

1 はじめに

富山県総合教育センター教育研修部において令和5年度調査研究事業「探究的な学習の実現に向けた授業づくりに関する調査研究—小・中学校における「総合的な学習の時間」を通して—」に携わった。そこでは、小学校における総合的な学習の時間の構想を担当教師とともに考え、実践を行った。その中で、探究学習における単元デザインシートの作成や学びの姿としての評価について考察を深めることができた。また、現場の教師が抱える探究学習の課題を知ることで、子どもたちがより深く学ぶことができる探究学習の実践について検討したいと考えた。

2 氷見高校 HIMI 学について

筆者が勤務する富山県立氷見高等学校は、富山県の北西部に位置する氷見市唯一の公立高等学校であり、普通科、農業科学科、海洋科学科、ビジネス科、生活福祉科の県内最多の5学科を有している。2010年に、有磯高校と旧氷見高校が統合し現在の形となった。この2010年から1学年すべての学科において総合的な探究の時間「未来講座 HIMI 学」（以下 HIMI 学）が実施されている。令和2年度から令和4年度まで文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の地域魅力型に採択され、氷見市役所と協働的に探究学習を進めた。2023年度からは、氷見市民の方々が「伴走者」として探究グループに参加し、適宜アドバイスをしたり、実際に伴走者の会社で生徒の案を基に商品の製作を行ったりしている。このように、現在の「HIMI 学」は、生徒、教師、市民である伴走者の3者が関わりながら実践を行っている。

3 課題と目的

2017年3月の学習指導要領改訂を受け、2019年1月に『児童生徒の学習評価の在り方について（報告）』が公表された。同年3月に『小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要領の改善等について（通知）』が発出され、高等学校の場でも観点別評価が導入され

た。その中でも特に「主体的に学習に取り組む態度」について、現場の教師はどのように評価をしたらよいのかと悩んでいる。また、遠藤（2022）は観点別評価について「『評定』が示されると、子どもたちや保護者の目は『観点別学習状況』ではなく『評定』の方に目が行ってしまい、どの側面に学習の課題があり、どの側面から学習を改善していったらいいのかという点に意識が向きにくくなってしまふ」と述べている。生徒が学習を振り返ったり、授業の意義を感じたりするためにも、現行の評価方法に関して検討する必要があると言える。特に探究学習においては、パフォーマンス評価が求められており、現場の教師はその難しさを痛感している。パフォーマンス評価について松下（2007）は「パフォーマンスから学力への解釈は主観的な性格を免れませんが、主観的であっても恣意的・独断的にはならないようにしなければなりません」と述べるが、そうした課題を乗り越え、パフォーマンス評価の信頼性を高めるために提案されているモデレーションを、探究学習の評価に導入したいと考えた。

またそのモデレーションについて、遠藤（2020）は、民主的な社会の実現に向けて、個々人の熟慮と異質な他者との知性的な討議によって既存の価値を問い直す感覚を鍛え、多数決に依存した意思決定に陥らないようにするためにも、モデレーションが自分の行動や判断の拠り所となる基準を多様な視点から問い直し続ける契機となると述べている。パフォーマンス評価についてのモデレーションそのものが市民性の育成に寄与している指摘である。この観点を本実践研究にも取り入れたい。

モデレーションに関する実践においては、辻崎（2022）や宮田ら（2022）、佐々木（2003）があり、どれも教師間あるいは教師と生徒間のモデレーションを通して評価結果のすり合わせを行っている。しかし、市民性の育成に着眼したモデレーション実践については管見の限りない。そこで HIMI 学を通して市民性の育成することを目指し、本実践研究を進めたいと考えた。

市民性について、小玉（2017）は、「シティズンシップ（市民性）とは、民主主義社会の構成員として自律した判断を行い、政治や社会の公的な意思決定に能動的に参加する資質を指す概念である」と述べており、重要なことは「争点を知る」ということだと言う。HIMI 学では、市民からなる伴走者が探究学習に参加している。その伴走者とのモデレーションを通して、市民の思いや意味を知ることが重要である。小玉（2017）は、「学校教育は知識の伝達の間としてよりも、相互の対話や議論によって知識のあり方を批評・探究し、考えていく場になる。そしてそうした知識のあり方の批評や探究、思考においては、相互の討論によって新しい知のあり方を創造することが重要視される」としており、相互の対話によってシティズンシップ（市民性）が醸成されるとした。HIMI 学は、教師、生徒、伴走者が関わりながら運用されている。その3者によるモデレーションを通して、それぞれの価値観や思いを知り、探究学習の目指す学習の姿がどのようなものか、どのような運用のあり方が良いかを考えるきっかけになり、それが市民性の意識の醸成につながるのではないかと考えた。

本実践研究において、市民性の育成を目指すために、大きく二つの活動を行っていききたい。一つ目は、教師間、生徒間のモデレーションを通して評価規準について考えることで、教師、生徒がそれぞれの価値観や視点をすり合わせることで、探究学習を通して、どのような姿を目指すのかを共有したい。二つ目は、市民である伴走者とのモデレーションを通して、地域の方々がどのような思いで HIMI 学に参加しているのかを知ること、より主体的に探究学習に参加することができると考えている。

4 研究の内容・方法

(1) 対象

氷見高校探究学習の担当教師、1 学年普通科の生徒、氷見市民からなる伴走者

(2) 方法

生徒、教師、伴走者によるモデレーションを実施する。その際に、子どもの姿を録音、録画し、子どもの発言から抽出していく。モデレーションを通して作成したループリックを基に教師が評価を行う。また、ループリックについて比較検討することで、探究学習における自分の姿を自己評価し、その内容から

子どもの変容や探究学習の意識を抽出していく。

(3) 実施計画

4月	生徒、教師、伴走者によるモデレーション実施。ループリックの作成。
5月～	授業内において振り返りシートを用いて学習の姿を記録する。
8月	モデレーション実施。
9月～	授業内において振り返りシートを用いて学習の姿を記録する。
12月	発表会に向けてループリックの検討を生徒、教師で行う。
2月	発表終了後、これまでの学習の振り返りを行う中で、生徒がどのように考えたのか、変容したのかを文章の中で丁寧に抽出していく。

5 今後の展望

本実践を通して、教師、生徒が他者との対話を行っていくことが、新たな価値観を獲得し、自らの市民性の変容にどのような効果をもたらすのかを、振り返りシートやモデレーション中の会話から丁寧に抽出し、明らかにしていきたい。

(参考文献)

- ・遠藤貴広（2020）「第 12 章コミュニケーションとしての評価」 pp.144-154 『学びを変える新しい学習評価理論・実践編 3 評価と授業をつなぐ手法と実践』ぎょうせい
- ・遠藤貴広（2022）「総合的な探究の時間における学習評価をめぐる論点」『日本科学教育学会第 46 回年会』 pp.89-90
- ・小玉重夫（2017）「第 7 章民主的市民の育成と教育カリキュラム」 pp.185-208 『教育変革への展望 5 学びとカリキュラム』岩波書店
- ・佐々木弘記（2003）「評価の統一を図るモデレーションプログラムの開発と評価」日本教育工学会論文誌/日本教育工学雑誌 27(Suppl.) pp.13-16
- ・辻崎千尋（2022）「武生高校におけるモデレーション実践の展開」『福井大学教育実践研究』第 47 号 pp.87-98
- ・松下佳代（2007）『パフォーマンス評価—子どもの思考と表現を評価する—』日本標準
- ・宮田佳緒里・林宏樹・奥村好美・井上稔雄（2022）「多角的なモデレーションが自己評価・相互評価・教員による評価のずれに及ぼす効果」日本教育心理学会第 64 回総会発表論文集
- ・中央教育審議会（2017）『児童生徒の学習評価の在り方について（報告）』
- ・文部科学省（2017）『小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要領の改善等について（通知）』